

平成11年（1999年）6月21日

第121回『21世紀塾』参考資料

（第10回提言）

『富士・箱根・伊豆』ナンバーを創設しよう

『21世紀塾』代表世話人 小野 徹

【問題提起】

車のナンバープレートを見ていると、「この連休は、横浜方面からの客が多いな」とか、「よくまあ、富山のような遠くからも来てるな」と思ったりする。

こういったことがすぐ分かってしまうのは、車のナンバーが、登録地域という看板を背負っている「動く広告塔」であるからだ。

これらを目のあたりにする時、まさに、我々は、車という交通手段が、人、物、情報、文化を運ぶ「文明の一大利器」であることや、道路の重要性を再認識させられる。

さて、では、立場を替えて、例えば、他所から、本年12月31日から始まる「伊豆新世紀創造祭」に訪れる旅行者はどう考えるのだろうか。

せっかくのお誘いだからと、「新世紀の観光システム！」を標榜する『伊豆』にきている筈なのに、どこを見渡しても、回りの地元車は『沼津』ナンバーばかりで、これは伊豆の先端の下田まで行っても変わらない。

沼津は県東部の中心都市であるから、伊豆一円が、行政的には『沼津』ナンバーであることは理解できる。

しかし、「伊豆新世紀創造祭」の開催を待つまでもなく、『富士・箱根・伊豆』国立公園は、我が国が世界に誇る地域であり、名称でもあるのだから、そこでの「動く広告塔」である車のナンバープレートに、『富士』『箱根』『伊豆』というビッグネームを、わざわざ捨てるようにしているというのはどうだろうか。

事務的にも、運輸局の沼津検査登録事務所で、『富士』でも、『箱根』でも、『伊豆』でも、それこそ『沼津』のままだでも、それぞれの好みの地域ナンバーを受け

付ければ良いのだから、簡単なことではないだろうか。

◇

◇

◇

「君たちがそんなことを言っている間に、お隣の神奈川県では、さっさと『湘南』ナンバーができちゃったね」

「『沼津』だって、近ごろ3ケタの車種ナンバーができたけど、『富士』『箱根』『伊豆』を創れば、そんな必要もなかったんじゃないか」

「ところで――もし、そういうことになったとして、『富士、箱根、伊豆』の、ト真ん中の三島はどうするの？」

「三島は、『三島』ナンバーでなくっちゃ」

「熱海は？」

「熱海だって、日本一の温泉なんだから、『熱海』ナンバーを欲しいんじゃないか」

「それじゃ、首相とロシアの大統領との会見場所となった、伊東は？」「開国の街、下田は？」「頼朝や政子の、韮山は？」というわけで、何とも収集がつかなくなるのが、それぞれの地域が強烈な個性と誇りを持つ伊豆というもの。

それ故に、この地域では、『伊豆』ナンバーというよりも、できれば『伊豆・修善寺』といった名称にしたいのだが、これは何も伊豆だけに限った問題ではなく、全国的に、あまり金のかからない「地方分権事業」として、又、それぞれの地域に誇りを持たせ、「地域の活性化」を図るためにも、車のナンバープレートの地名の見直しを、提唱したい。

(注) この小論は、小生の持論として断片的に話し、書いて来たものを、県建設業協会発行の「けんせつ静岡 第190号『夏号』」用にまとめたものです。

平成18年(2006年)11月11日

富士山ナンバー 早期実現を要望

国に御殿場市長ら

富士山ナンバー創設促進協議会会長の長田開蔵御殿場市長と山梨県側会長の萱沼俊夫富士吉田市長らが十日、国土交通省を訪れ、富士山ナンバーの早期実現を求めた。

富士山ナンバーの実現は、富士山を中心とした環境保全や火山防災、観光連携などの県境を越えた事業の連携を推進し、環富士山地域の活性化が

図られると訴えた。静岡と山梨両県は昨年、構造改革特区での実現を提案し、「平成十八年度中に結論を得る」という政府方針が示されている。

国交省幹部らとの面談を終え、長田市長は「二県にまたがるために生じる警察の管轄や税金のシステムなどの問題について国が研究している。全国的にも同様の事例があるため、富士山ナンバーで試行的に検証する可能性などもうかがえた」と手応えを話した。